

日本とイスラーム諸国民間の接触—相互イメージの変化(要約)

片倉 邦雄

- I. イスラーム諸国の対日イメージ
 - (1) 日本への敬意、憧れ
アジアの小国、帝政ロシアを破る(日露戦争)
日本女性を賛美する詩が教科書に(ハーフィズ・イブラヒーム)
「日出ずる国」(エジプト政治家ムスタファ・カーミル)
青年トルコ党革命指導者 カーマル・アタチュルク
 - (2) 日本での回教研究熱高まる(「南方地域」宣撫工作、占領政策の一環として)
欄印軍政下、宮城遥拝を強いて反発招く。(キブラ 礼拝方角)
参考: 齊藤鎮男 「私の軍政記」1977
 - (3) 戦後高揚する産油国民族主義に呼応した日本独自のエネルギー確保の努力
出光「日章丸」事件(1951—52)
アラビア石油 自主開発原油第一号(カフジ 1959)
 - (4) 経済技術大国(近代化のモデル)
勤勉実直な日本人、終身雇用・年功序列による経済秩序
経済至上主義の日本(「エコノミック・アニマル」 パキスタン ブットー元大統領の批判)
 - (5) 非核・平和国家・中東問題で「手を汚していない」日本
- II. イスラーム諸国の変容と対日イメージの変化
 - (1) 民族主義からイスラーム回帰へ(イラン・イスラーム革命 1979)
イラク共和国でも第一次湾岸危機の際、国旗に「アッラホ・アクバル」(神は偉大なり)を付加し、イラク戦後もそのまま使用している
 - (2) 財政悪化、インテリ失業者増大、就職難の時代に入る
民族自決・抵抗運動(パレスチナ・チェチェン・イラク・・・)はテロではないと主張
 - (3) インターネット世代の増大と新たなニーズ
 - (4) 対米追従のイメージ増大
ネオコン対テロ闘争(十字軍的発想)による民主化押し付けに日本は盲従しているのではないか・・・との疑問
 - (5) ルック・イースト政策の消滅(イスラーム諸国会議のイデオログ、マハティール前首相の見方の変化)
- III. 「ソフト・パワー」としての日本に対する期待に応じるための方策
 - (1) 日本近代化の秘訣「和魂洋才」を訴える—
例えば、伝統スポーツ「心技体的一致」(イスラーム教義上「タウヒード」)
ODA、NGO による技術協力、特に医療分野における協力実績の拡大(東洋医学の紹介も相手の心情に訴える効果あり。イブン・シナは「統合医療の祖」と崇められる。)
 - (2) 知的対話の促進 『イルム(知)をうることが人生最大の目的』
—河野イニシアティブ 『文明間の対話』とその後
 - (3) 文化交流の促進—現地のニーズに応じた講演、音楽・演劇、展示、映像文化、特に劇画

など

- (4) イスラーム世界における日本語普及と日本におけるアラビア語研修(アラビア語は国連の公用語、26カ国で公用語。イスラーム諸国会議機構57カ国、オブザーバー3カ国でもアラビア語は価値言語として敬意を払われている)
- (5) 日本における公共施設に Mediation Room(瞑想の部屋、祈りの空間)を設置すること(例:国連本部、世界多数の国際空港)

参考文献:

「イスラーム世界事典」	片倉もところ編集	明石書店	2002
「日本人の中東発見」	杉田英明	東大出版会	1995
“Japan and the Middle East”	片倉邦雄・片倉もところ	中東調査会	1994
「イスラーム誤認」	板垣雄三	岩波書店	2003
「イスラームの日常世界」	片倉もところ	岩波書店	1991